
そして君に恋をした

逸鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして君に恋をした

【Nコード】

N2211S

【作者名】

逸鬼

【あらすじ】

俺が好きになった子は中学に入った途端、引越してしまっただけで、一度彼女への想いを無くした俺は……

しかし彼女は半年ほど経ち、また俺の住む場所に引越してきた。

君を好きになった頃

初めて君と同じクラスになったのはいつだったか。

小学生の五年生だったと思う。もつと前にもあったかもしれないけど、忘れてる。

正直、小学生の頃のこととはあまり覚えていない。

楽しかったことも、悲しかったことも、なんだかあやふやだ。でも、これだけは覚えている。

確かに俺は、小学六年の時から君が好きだったんだ。

きっかけなんて覚えてない。

理由なんて分からない。

いつの間にか君を見ていて、ハッと気付くと恥ずかしくなる。

たまに話が出来たときは、それがどんな内容だって嬉しかったと思う。

でも俺は、君に想いを告げることはなかった。

あの感情がなんなのか、俺でもあんまり分からなかったから。

あやふやのまま、誰かにこの気持ちを知られなくなかったから。

『好きな人は誰？』ってという話のときも、俺は絶対にバラしたことはなかった。

そのまま一年間が終わり、俺たちは小学校を卒業した。

俺は君に何も伝えられないまま。

俺が君にとって、ただのクラスメイトでしかないまま。

俺たちは卒業した。

中学生になった。

心残りがあつた俺は、自分の名前をクラス発表でみつけたあと、すぐに君の名前を探した。

でも、

君の名前が見付からない。

同じクラスにはない。

でも他のクラスにも居ない。

その数時間後、教室で騒いでいた女子たちが君が引越したことについて話していた。

それは、確かに俺の耳に届いていた。

君が居なかった頃

中学一年はなんてことはない、普通に過ごした。

友達が増えて、部活を頑張つて、それなりに勉強もして。

そうすると、次第に君のことは気にならなくなった。

会うことはないし、見ることもない。

最初の方は君と仲良くして、連絡先くらい聞いておけば、なんて考えもしたっけな。

そうやって一年間を過ごすうちに、君に対する気持ちはいつのまにか冷めていた。

どーでもいっか。

そんな感じに。

だけど、俺が君に寄せた気持ち了他の子に抱くことはなかった。

君に対しても、なんだけどな。

幸いというか、そういう好き嫌いを気にせず必死にやって、満足が出来た頃だったんだ。

だけど、俺が君への想いを無くした中学一年の秋。

君はまた俺の住むこの街に戻ってきた。

最初に聞いた時は、そりゃ驚いた。

でも、やっぱり君に対してあの気持ち蘇ることはなかった。それ

に、君が転校して来ても結局は会うことがなかった。

君の教室は三階で。俺の教室は2階の隅。

不思議なことに、見掛けることすらろくになかった。

行事があっても、集会があっても、だ。

もしかしたら、君は俺のことは見ていたかもしれない。部活の成績が良くて、全校の前で表彰されたことが多かったから。

きっと君は何も思わなかったんだろうけど。俺と同じように。

こうして、中学一年は君と会うことなんてろくにないまま終えた。そんな一年で満足はしてたんだ。

そして

俺は中学二年で君と再開をする。

君が居なかった頃（後書き）

この小説は、今後も今のような書き方をする予定です。

よって、相当短い作品になると思っています。

物足りなさはあるかと思いますが、最後までお付き合い頂ければ幸いです。

君を避けていた頃

中学二年になり、俺は君と同じクラスになった。

クラス名簿で君の名前を見付けた時は、やっぱり少し嬉しかった。それを勝るだけの、まあいっか、って気持ちがありはしたんだけど。

その日から俺は、再び君と同じ教室で日々を過ごすことになった。

でも、俺たちの関係はことさらそれまでと変わったわけではなかった。俺たちの関係はことさらそれまでと変わったわけではなかった。

仕方ないことだと思う。

だって、小学六年の時も大して仲が良いわけでもなかったし、そんな状態で一年ほど挨拶すらしなかったんだから。

だけど、そんな中でも行事なんかはやってくる。

親睦深めるためっていう題目を掲げてはいるけど、ろくに面白くもないM中フェスタ。

イマイチ盛り上がり欠ける時期にある、五月の体育祭。

主なものはこれくらいかな。

俺は結構行事に参加するのは好きだから、実行委員をやったりもしたっけ。

体育祭なんかは、結果的にみんなで騒いでワイワイやった。結果に一喜一憂して、一日中楽しんだ。

まあ俺と君はこんな行事の中でも話すことはなかったんだけど。

こんな風に行事を楽しんだ。

他にもこの時期は、一つ上の先輩と出来る部活の最後だったし、悔いを残したくなくて頑張った。そのお陰で上位入賞とかもした。授業も楽しかった。馬鹿なことをして笑わせてくれるクラスメイトや、楽しく授業をしてくれる先生がいて、飽きることはなかった。放課には新しく出来た友達と喋ったり、馬鹿なやつらと馬鹿騒ぎもしたり（と言ってもたまにだ）、二年になって仲良くなったアニメ好きと話したりもした。

充実してた。

毎日が楽しく過ごせた。

でも、どこか物足りなさを感じてもいたんだ。

正直に言おう。

この時、俺は君が好きで仕方がなかった。

気付いたら、小学六年のあの気持ちが蘇っていた。
でも。

それを認めたくなくて。

だからその気持ちに気付かないフリをして。

いつのまにか君を避けていたんだ。

君と会えなかった頃

君と話すことすら出来ていないまま、夏休みに入った。
長い長い休み。

一ヶ月半くらい。

それだけの間、君と会えなくなる。

それが堪らなく辛かった。

仲の良い友達と会えなくなることも。

趣味の会う人と気兼ねなく話せなくなることも。

なによりも、ずっとずっと辛かった。

でも、やるべき事はたくさんあった。

先輩と出来る最後の部活。

毎日の練習を頑張り、夏の総体に参加した。

結果は……団体、個人県大会出場。ただし、直ぐに敗退。
先輩たちが泣いた。

俺は泣かず、先輩たちを黙って見ていた。
家に帰って、ひっそり泣いた。

そんな時に思った。

もし君に慰めて貰えたらな、と。

いつの間にか、安らぎすらも君に求めていた。

夏休みが後半に入った。

出校日はあったけど、君は休んで会えなかった。

落ち込みが半分。

安堵感が半分。

日に日に、いつの間にか大きくなっているこの気持ち。

今、君を見ると、抑えが効かなくなるかもしれない。

そう考えると怖かった。

休みを挟んで少し考えてみたんだ。

この想いをどうするのか。

伝えるのか。

伝えないのか。

伝えたいに決まってる。誰かをこんなに想ったことは初めてなんだ。

自分の気持ちを込めて、君に伝えたい。

だけど、俺の出した結論は……伝えない。

確かに君のことは好きだ。

それだけに、迷惑を掛けたくない。

話したことも無いのだ。

いきなり好きと言われても、困るだろう。

だったら、俺は伝えない。

この気持ちを固く封をして、決して表に出さないようにする。

一度そう決めると、不思議と気楽になった。

君への気持ちは変わらないけど、どこか固執しなくなった。

言ってしまうば、それぐらいの軽い気持ちだったんだろう。

だから気楽になる。

俺はそう納得した。

部活の部長になり、また新しい気持ちで部活も頑張りだした。

そんな時、仲の良い女子の一人から遊びの誘いを受けた。

なんでも、みんなでカラオケ行くんだとか。

男子も仲の良いやつがいて、それなりに楽しめそうだから承諾した。

その当日。

待ち合わせ場所に早めに行った俺は、まだ来ていないみんなを待つことにした。

しばらく待ち、最初に来たのは……君だった。

君と初めて『会った』頃

あの時の驚きは、俺の思考を一時停止させるには充分すぎた。

待ち合わせの場所に使っていたのは……たしか、人気のない公園だったと思う。

近くに駅があり、たいていはそこで待ち合わせする。

だから、君が俺たちの待ち合わせ場所に來た理由が解らなかった。

君はふと立ち止まって、携帯を片手にキョロキョロと辺りを見渡したっけ。

その仕種が可愛くて、よく覚えてる。

そして、小さな時計台……俺のいる方へ歩いてきた。

近くまで来て、ようやく俺がずっと君を見ていることに気付いたっけ。

少し恥ずかしくて、慌てて目を反らしたんだよな。

『えっと……おはよう……』

たしかだけど、君の挨拶はこんな感じだったと思う。

ついでに言えば、俺へ初めて声を掛けてきた言葉、か。

それを認識した途端、嬉しくなった。

けど、表には出さない。

知られないように、胸の内に秘めた。

『あー……おはよう。……一応、もうこんにちは、だろっけど』

そう言つと君は、少し顔を赤くしたっけ。

『そ、そういえば……あはは……。えっと……今日のカラオケには
』？

君から話題を振ってくれて、本当に感謝した。

俺からは、気になつても気安く声なんて掛けられなかったから。

そこから、たどたどしくはあつたけど、会話と呼べるようなものが生まれなつた。

他のメンバーが来るまでの間、僅かながらも感じた幸福。

たった十分程度だった。

でもそれだけで、あの日の俺は満足していたのかもしれない。

その後、時間通りにみんな集まり、カラオケで騒いだ。

聞き専な俺は、上手いやつの歌を褒めたりだとか、雑談して過こしたっけな。

……君が歌つた歌が、特別に違った印象を持ったのは、誰にも言えないことだっただけだ。

君と近付きだした頃

長い長い夏休みが終わった。

あの日以来、結局、君に会うことはなかった。

だけど、少しだけ変化はあった。

メールアドレスの交換、だった。

なんとなく、その場の流れで交換してない人は交換しようってな
った。

それで、俺は君とアドレスを交換したんだけど……。

全く活用していない。

交わしたメールは、最小の確認のメールだけだった。
それ以外は、どちらからもメールはしていない。

そんな状態で学校が始まった。

そしてこの時期から、合唱コンクールのクラス練習が始まった。

なぜかはわからないが、俺は男声パートのパートリーダーに。
君はソプラノパートのリーダーだったっけ。

アルトパートは、この前のカラオケの主催者。

……なにが悪くてこんな役割を……。

そんな風に思ったけど、君と話しをする機会が増えたのは嬉しかった。

他愛のない会話だったり、合唱コンクールのことについてだったり。

それ以外で、あまり喋ることはなかったんだけど、それでも以前よりは君との仲は縮まったと思う。

毎朝あいさつを交わすようになった。

放課でも、たまに話すことが増えた。

会話自体は少ないし、やっぱりメールはしないんだけど。

それでも、見ていただけじゃなくなった。

それがなにより嬉しい。

たとえこの気持ちを出さないとしても、それが消えることはないと思う。

君と話せる。それだけで、俺の気持ちは幸せだった。

君に惹かれ始めた頃

合唱コンクールは惜しくも優秀賞、二位だった。

クラスの全員がもつとやる気を出していれば、最優秀も狙えたと思う。

終わった今からしたら、言っても詮のないことなただけ。

でもこの行事を経て、俺と君の距離が近付いたのは間違いない。

夏休みが始まる前では信じられないくらい俺は君とよく話し、学校でも一緒にいることが増えた。

メールだけはやっぱりしていないんだけど。

もともと俺はあまりメールや電話をせずに、直接話すことが好きだった。

君もメールはあまりしない方だ、とは聞いたからどちらもメールを送ることが無いのだ。

そんな状態が続き、十二月になった。

俺クラスでは月始めに一回、席替えをする。

毎回毎回、みんなが一喜一憂するし、俺もまたそうだ。

今までは、言ってしまうえばハズレだった。

しかしながら今回……。

なんとなく、君と隣なら嬉しいな、程度の気持ちでくじを引いた。

その結果、俺の隣の席は君になった。

君がどんな気持ちで隣に座っているのかは、分からなかった。でもそれが気にならないくらい、俺の気持ちは舞い上がったことは鮮明に覚えてる。

もうそれからは、毎日の学校が楽しかったと言っても過言ではないと思う。

君と話しているうちに、君のことをどんどん知った。

俺の知らないことを君が話してくれるのは、俺にとってどんなに嬉しいことが。

でも、楽しみになったのはそれも一因だろうけど、やっぱりなによりも

君に更に惹かれていたからなんだ。

君という幸せを知った頃

楽しく、充実した日々はあっと言う間に過ぎて行った。

君の隣の席でいれるのがたった二十日なんて、短すぎる。

この時ばかりは、冬休みがあることが楽しみにならなかった。

夏休みよりは酷くないとは言え、また君に会えなくなる。

それがまた少し寂しい。

そんな俺の心境を嘲笑うかのように、日時は無情に進み、なにもないまま冬休みに入ってしまった。

冬休みはとにかく部活ばかりだった。

クリスマスや正月といった、とても魅力的な行事はあったのだが、俺はそのほとんどを部活の練習で費やした。

どうせ一緒に過ごすような間柄のやつはいない。

……男友達なら居なくもなかったが、そういう日に中学生のうちに騒ぐ必要はないと考えるやつらだった。

俺も、ただ騒ぐだけのためにわざわざ部活を休む気にはならなかった。

それでも、心のどこかで君と過ごせたら、なんて淡い期待も持っていたんだけど。

結局、君と冬休みに会うことはなかった。

暇がある時は買い物なんかによく出掛けたのだが、君を見掛けることすらなかったのだ。

なんとなく気落ちした。

が、そこまで酷いものでもなかった。

それは君を意識しつつも、表に出さないと決めたからだろうか。それは解らない。けど、君の所属している部活と活動時間が重なる度に君を探したのは隠しようもない。

冬休みが終わってからは、君と席もまた離れ、なんとなくダラダラと日々を過ごしていった。

変わらない日々。

部活に打ち込み、勉強をそこそこなし、友達と馬鹿なこと騒ぐ。

それがずっと続いていた。

しかし、一人の仲の良い女子から聞かされた一言が俺の心を揺さ振り、また俺の日に色付けをした。

彼女が俺に伝えたこと。それは根も葉も無い、噂と言うことにすら抵抗感があるものだった。

けどそれは、俺に細くなっていった光の先に向かうきっかけを作ってくれた。

その一言。それは……。

俺のことを、君が……好きらしい、というもの。

三月の上旬。もう中学二年が終わりに近い時期だった。

君に恋をした頃

恋は盲目という言葉を、俺は身を持って経験したと言っても過言ではないと思う。

信憑性のカケラもない君の想い人を聞き、確かに俺は舞い上がっていたのだから。

俺が君へ寄せていた気持ち、あの日から一気に溢れ出したのは言うまでもない。

燻っていた小さな火種が大きな炎になるように。

満たされていた杯に、大量の水を流し込むように。

俺に自制させていたちっぽけな鎖は、簡単に切れてしまった。

君の声が気になって。

君の視線の先を知りたくて。

君のすぐ側に居たくなって。

今までにないくらい、君を見るだけで気持ちが高ぶった。

まるで自分が、創作なんかに出て来る恋する乙女のように感じ、苦笑しか出来ないこともあった。

でも、そんなことすら、あの時の俺は気にならなかったんだ。

だけど、そんな俺の想いとは裏腹に、君との接点はやっぱり少なかった。

朝、たまたに挨拶を軽くするくらい。

メールをする、というのはあったがメールの内容をどうするのかで悩み続け、結局はしていない。第一、俺は基本的にメールで雑談なんかしないのだし。

本当に確認したいことがあった時くらいしか、メールはなかなかしない。

そんな俺が、気の利いたメールとか、会話の続くメールなんか出来る道理も自信もなかった。

学校の行事も特にない。

このまま、なんとか気持ちを表に出さずに、進級して、違うクラスになるんだろうな。そんなことを漠然と考えていた。

というか、そうするつもりだった。

けれど、これは幸か不幸か。

何度目だろうか。俺にチャンスに巡りあった。

事の始まりは、不覚にもいつも雑談するメンバーに、俺の好きな人がバレってしまったことだ。

あの時の俺はどうかしてたと思えない。どうしてあの時に限って、『好きな人はだれ?』という質問に口ごもったのだろう。

それまでは、笑って『いない』って言えてたのに。おまけに流れに身を任せて暴露をしたし……。

なんでか。

ああ、分かってる。

そんなことは俺の中じゃ単純明快なことではない。

ただ……ただただ君が好きで、想いを隠し通せなくなってきたっ

ただけなんだ。

ただ気になってただけだった。

君と会えなくなつて、すぐに気にならなくなるくらい程度の気持ちで。

だけど、君にまた再会した。そして少しずつ関わりが出来ていた。知らず知らずのうちに、いつの間にか惹かれてて。

気付けば、俺の心の中に君が居た。

君と話せるだけでうれしかった。

君に会えないだけで落ち着かなかつた。

なにか分からなかつた気持ちは、いつの間にか胸を締め付けるような切なさ、仄かな甘さに変わっていた。

この気持ち。そっか。これが、俺にとっての初恋。

恋をしたきつかけなんて無かつた。

気づかぬうちに、君に惹かれて……。

小さな繋がりから生まれた気持ちが、次第に大きくなっていった。

そして、君に恋をした。

決めた。

必ず俺は、この学年が終わる前に君に俺の想いを告げよう。

迷惑かもしれない。

敬遠されるかもしれない。

でも俺は、そんなことを気にするくらいなら、俺の気持ちを伝えたい。

たとえば、その結果がどんなものになっただとしても、伝えずに後悔はしないように。

君に恋をした頃（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

突発的な思いつきで始めた連載でしたが、自分の書きたいものが書けて十分な自己満足が出来ました（笑）

ろくな会話もなく、ただ『俺』の心理描写を主体とした（つもり）の文でしたが、暇潰しにでもなれば幸いです。

想いを告げる決心をした『俺』がこのあとどうなるのか。

気になるところですが、『そして君に恋をした』はこれで完結です。それがこの物語なのでから。

最後にもう一度。

この物語を読んで頂き、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2211s/>

そして君に恋をした

2011年10月9日22時59分発行